

令和元年5月29日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03358

研究課題名(和文)「同時代性」の探究：思想史・芸術学・文化ポリティクスからの複合的アプローチ

研究課題名(英文) Research on the contemporariness: a compound approach through history of thought, science of arts and cultural politics

研究代表者

長木 誠司 (Choki, Seiji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50292842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：同時代的であるとはどういうことなのかという問いを出発点に「同時代性」の概念的な内実と実践的な射程を、思想史的な変遷と文化ポリティクスにおける現在を架橋しながら明らかにした。同時に文学・芸術諸ジャンルにできるだけ多くの事例を求め、メディア環境の進展がもたらした効果をも慎重に考慮しながら、同時代性をめぐる表象の多面性を明らかにした。ポストモダン以来、意匠を取り換えながら引き継がれた「ポスト」にもとづく視角を決定的に更新し、潜性態において過去・未来を含みながら、それ自体として異なる時間が遭遇するトポスでもある同時代性の複合的な性質を解明するという目的に、さまざまな角度からアプローチして成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

非歴史性への志向とアイロニカルな事後性を特徴する従来のポストモダン研究に対し、本研究は1) 歴史への関係が強い意味での経験であり、したがって過去はむしろ同時代性の構成的与件であると捉え、2) 思想と創作、また端的に生存の原勢態に胚胎される未来を徴候的に認識しようと試みる点に独自性を持ち、同時代性をレトロスペクティブとプロスペクティブの相互的浸透をつうじて再発明することをざす本研究は、人文学の発見術的価値の拡大に確実に貢献する。

研究成果の概要(英文)：What does the contemporariness mean? This research intends to reveal the philosophical content of this concept and the perspectives of its possibilities both in the course of the history of thought and from the point of view of cultural politics. On the other side this research points out the diversity of representation about the concept of contemporariness by examining a variety of examples in literature and arts as well as the effect given by the development of media-environment. A typical view of 'post-', which has been taken over from the postmodernity should be updated and the concept of contemporariness, where plural times and ages including past and future meet together, should itself reveal its compound character. For this purpose different approaches were adopted which achieved magnificent results.

研究分野：表象文化論

キーワード：同時代 アナクロニズム ポストモダニズム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ポストモダン以来、意匠を取り換えながら引き継がれた「ポスト-」にもとづく視角を決定的に更新し、潜性態において過去・未来を含みながら、それ自体として異質な時間が遭遇するトポスを探るために、「同時代性」の複合的な性質を解明することが必要であった。そもそも同時代的であるとはどういうことなのか。本研究はこの問いを出発点に、「同時代性」の概念的な内実と実践的な射程を、思想史的な変遷と文化ポリティクスにおける現在を架橋しながら明らかにする必要性から生じたものである。思想・文学・芸術諸ジャンルにできるだけ多くの事例を求め、メディア環境の進展がもたらした効果をも慎重に考慮しながら、同時代性をめぐる表象の多面性を明らかにすることが必須と考えられたのである。この場合、「同時代的」に相当するヨーロッパ語 (ex. contemporary) は、語義に即するなら「時 (tempus) において共に (cum)」あるさまを意味している。一見して自明と思われるこの時間的な共存は、しかしそもそも多様な異質性を前提し、さらには、それら異質性相互の遭遇や交渉、あるいは衝突から構成されたものと考えらるべきである。本研究が「同時代性」をキー概念として検討を試みるのは、このような、クロノメトリックな同時性を超えてアナクロニクな錯綜をさえ内包する、認識と想像と情動に連動した複層的な時間性の動態にほかならなかった。

以上の基本的なフレームは、ニーチェやベンヤミン、バルト、さらに遠くパウロラの歴史時間論を踏まえて、同時代性の核心を現在時からの「齟齬 (sfasatura)」によって定義したジョルジュ・アガンベン (『同時代性とは何か』(2008年)) と深く共有されるものである。また、そのバルト、アガンベンらの仕事に触発されながら実際の創作をつうじて生成する同時代的な美学をリアルタイムに捕捉することをめざすフランスの研究グループ「同時代人たち (Les Contemporains)」の活動もひとつの着想源となる。同様の観点を芸術のみならず思想・文化ポリティクスの領域にも敷衍することで、同時代をめぐる歴史的な視角と同時代的な視角を総合することが本研究の前提であった。

研究代表者である長木は 20~21 世紀の西洋芸術音楽を専門領域とするが、この領域ではもとより創作と演奏 (上演) が常に相補的に影響し合い、過去と現在がともに未来志向のもとで歴史を編んできたという事情がある。だが、その「同時代性」を捉える学的な試みは、とくに 1970 年代、加速度的に進んだジャンル・スタイルの混淆と対比的に旧来の進歩 / 退嬰、発見 / 復古という二項的な認識フレームから脱却できず、複雑化する現状の前に後退を余儀なくされてきた。そのようななか、ジャンルの現状を記述しようとするこうしたプロブレマティークに対して思想史の側から貴重な示唆をもたらすと思われたのが、上に挙げたアガンベン独自の「同時代性」の概念であり、同じ概念が芸術ジャンル、さらには社会状況との関係を認識する指標としても有効であると考え、これを基本理念に据えたうえで、方法的には思想史に中心としながら芸術学・文化研究を統合する複合的な研究を試みる意義を確信するに至った。

### 2. 研究の目的

1. の前提に基づいて、本研究は次の 3 点の解明を目的とした。

- 同時代性の思想史と思想における同時代：同時代性に対する思想認識の変遷をたどるとともに、今日の思想における同時代性の主題・方法上の意義を明らかにする。
- 同時代性のポエティクス：文学・芸術の諸ジャンルを技術的条件の変化を考慮に入れつつ分析し、同時代性の多様な表象形態を明らかにする。
- 同時代性のポリティクス：思想・芸術・文化と時代状況の交渉のありようを事例に即して分析し、同時代性をめぐる政治力学を総合的に明らかにする。

### 3. 研究の方法

次のようなサブテーマをつうじておこなわれた。これらは研究年度ごとに振り分けられ、個人レベルおよび議論の場としての研究会レベルで、そして公開国際シンポジウムで相互の研究成果、同時に外部からの意見を共有しあう形で行われた。

- 同時代性の思想史と思想における同時代
  - 同時代性を現在性との「齟齬」によって定義するアガンベンのテーゼを基点に、近年の歴史学における「現前」の主題とも照らして総合的な思想史を構築する。
  - 方法としてのアナクロニズム：ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンに至るアナクロニズムの方法的精練の過程を、イメージが実現する同時代性を把握しようとする格闘の連鎖として再考。
  - フェミニスト / クィア・タイムにおける接合と分離の時間性：過去との情動的接合を重視するクィア・タイムと、その暴力性を指摘する近年の批判的な言説を複眼的に考察。
  - 合理性の言説における地域性と同時代性：時空間的な現在・現前を重視する社会論的な合理性へアプローチを批判的に再検討しつつ、その有効性を中国思想との比較をつうじて検証。
- 同時代性のポエティクス
  - パラダイムとしての「コンテンポラリー・アート」：認識論的パラダイムとしてのコンテンポラリーという観点から、世界の戦後美術における同時代性の意識化を探る。
  - 現代文学・音楽における「同時代性」の構造：現代文学・音楽における「生きられたものとしての過去」を分析し、同時代性を実現する想像装置としての文学・音楽の形を考察。
  - パッチワークと時間性：極限的に加速するスタイルの相互浸透を分析し、ミクロに断片化された要素の接合=パッチワークから、なお生成しうる時間経験の可能態を探る。

4) コンボラ写真における同時代性：いわゆる「コンボラ写真」を分析し、技術性の欠落が「日常性」を媒介として同時代性へと接合されるメカニズムを批判的に解読する。

#### c. 同時代性のポリティクス

1) 性的少数者の権利運動における地域性と同時代性：性的少数者の権利をめぐる先進性/後進性の錯綜を、地政学的条件と言説の対抗関係を背景として分析する。

2) 「リアルタイム」の支配と対抗的時間：グローバルに実現されたリアルタイムネスに対して、技術基盤を共有しつつ対抗的な時間経験を創出しようとする試みを分析する。

3) 租界期上海のシネ・ポリティクス：1920-30年代の上海を事例として、映画文化の同時代的な混淆と、その背景となった歴史・政治的な条件の複雑性を解明する。

4) 検閲と芸術の同時代連関：近年、世界的に顕在化してきた（疑似的な）検閲活動を同時代的な徴候として動的に分析する。

#### 4. 研究成果

共同研究の内容は、あまりに多岐にわたっているため、ここでは上に挙げられた「同時代性のポエティクス」(3.b)という課題の枠内で第2年度にあたる2017年度に行われた国際シンポジウム「尹伊桑の『同時代』?」の内容を中心に、研究成果の一端を報告するにとどめたい。ここで同時代性はアナクロニズムとの連関において、同じ時期における韓国の尹と日本の松平頼則両者の比較のなかで検討された。

ジョルジュ・アガンベンは、著書『裸性』のなかに収められている「同時代人とは何か?」のなかで、「わたしたちと同時代に属するのは、誰であり、何であるのか。そして、何よりもまず、同時代に属するという事は、何を意味しているのか」という問いを立て、ニーチェの『反時代的考察』における「同時代とは、反時代的である」という主張に依拠しながら答えている。

「自身の時間に真に属し、自身の時間と真に同時代的である人物は、自身の時間と完全に一致することも、自身の時間の要求に順応することもできません。したがって、この意味では、そのような人物は非現実的であるともいえます。しかし、まさにこのゆえにこそ、この割け目とアナクロニズムをとおしてこそ、この人物はほかの人びと以上に、自身の時間を知覚し、把握できるようになるのです」(同上)

「アナクロニズム」は、時代のスタイルや固有文化から派生するスタイルが、さまざまに混淆するポストモダンから今日までの芸術状況—音楽状況とも言い換えられよう—が設定されていく以前の歴史的状況、すなわちモダニズムまでの歴史的状況に対しても、さまざまな時代的・時間的、あるいは文化的・空間的な差異性を「同時代」としてアナクロニズム的に捉えるべき視点を与えてくれる。アナクロニズム的な要素は、過去を示す否定的なものでも、未来を予期させるものでもなく、いわば同時代の未評価の遇有的な要素なのであり、それが実際にはいかなる痕跡として、「残存」としてわれわれに働きかけるのかが問われることによって、歴史は作品とわれわれとの編み合わせとして立ち現れてくる。

今日、尹伊桑の創作活動は、アジアの作曲家が東西の文化的な差異を認識しながら、その融合を果たした代表的で「成功」したケース、同時に極めて特異なケースとして認められようが、それは作曲家の波乱の生涯を知っていたとしても、そして作品に込められた主張が、きわめて真摯で、あるいは悲劇的な要素を示しているにしても、芸術的には成功した、幸福な融合として捉えられるべきである。しかしながら、この尹の最終的な芸術的成功には、実際にはさまざまな偶然的な時代との接触のなかで、いわばそれ自体がアナクロニズム的な要素として考えられるものが見て取れる。そしてそれは、まさに作品そのものへと反映されている。

渡欧当初にいたフランスから1957年に早々とドイツに移った尹伊桑の評価に関して決定的な役割を演じたのが、ダルムシュタット現代音楽夏期講習会とドナウエッセンゲン現代音楽祭であった。尹は前者の講習に1958年に初めて参加したが、このタイミングも、彼のその後の創作と評価に決定的な意味を持っていた。1950年代のダルムシュタットとドナウエッセンゲンでは、セリーの可能性もすぐに疑問視されるようになり、技法はさまざまな広がりを持ち始めていた。非ヨーロッパ世界の音楽文化への視野を広げようという方向性も、そのひとつである。まさにこの時期に尹はヨーロッパにいた。

例えば、ダルムシュタットでこうした東洋への視線のメルクマールとなる催しが、1959年に行われた日本人作曲家の作品特集である。松平頼則が日本の現代音楽についてのレクチャーを行い、諸井誠のセリエルな作品や武満徹のミュージック・コンクレート、あるいは黛敏郎の《涅槃交響曲》などの例を音で示していた。こうした日本の現代作品の紹介の流れのなかで実現するのが、1960年のドナウエッセンゲンにおける松平頼則の3つのオーケストラのための《舞樂組曲》の初演である。日本の舞樂と西洋風の十二音技法を結びつけたこの作品は、しかしまったくの不評であった。日本的な精神と西洋の共生であったはずの作品に、ドナウエッセンゲンの聴衆は「コントラストの乏しさ、エモーショナルなものの拒否、心理的な意味で展開のない音楽」しか聴かず、「謎のような中断と静止によって貫かれた、装飾的な線や動機らしい形が偶然のように編み合わされたもの」しか聴き取らなかった。確かにセリエルではあるが、音響作法と呼んでもよいものが見受けられる松平作品が、「新たな」音響を追究した、東西の「融合」作品であることには間違いなかったが。

初演会場でも批評でも不評であったこの作品に対し、その6年後に尹が「主要音」手法を駆使して作曲した《レアク》のドナウエッセンゲンでの初演は、歓喜の声とともに好意的に迎え

られた。ヨーロッパの聴衆に尹の音楽が肯定的に受け容れられた背景には、この作品が持っている、動きとダイナミクスの著しい展開による、はっきりとした強弱と起伏の要素、いくつかの部分に分けられる形式面での区分、一種の物語的なものに連なるような劇的な仕草、すなわち情緒的と呼べるような連関を呼び込む要素があったと言える。松平作品とは裏腹に、尹の音楽が東西の融合・共生として捉えられた背景にある音楽の要素は、ヨーロッパの前衛音楽にとって、けっして先端の要素ではなく、むしろ古来からあるものである。

ここでアナクロニズムの話が戻ってくる。最も新しい世界音楽の創出を待ち望むヨーロッパ的な思考と、それに即しながら東西の融合を意図する尹の音楽のなかにある、アナクロニズムの要素が、結局は尹の音楽の同時代的な存在感を作り上げている。それが認められない松平の音楽は、この東西の融合という大きな流れに合流することができなかった。融合しても「異質」なままに留まる松平作品に対し、「異質」でありながらヨーロッパの聴衆に理解できる音楽を作っていた尹。そのことは同時に、1970年代以降、ヨーロッパ前衛が新口マン主義などによって、急速にそれこそ「アナクロニズム」的な創作に移行していった際に、表現主義との相溶性が当初から指摘されていた尹の音楽が、煌めくような同時代性を担いつつ賞賛され、受け容れられていった事実と符合するだろう。

共生の試みは、一様に存在するが、一様に認められるわけではない。そこには、同時代のものが、いかなるアナクロニズムを内包し、それが実際いかに「残存」として発動するかという問題が大きく関わっている。松平頼則と尹伊桑は、そのひとつの事例を示している。尹伊桑の同時代とは、ではいつだったのだろうか？同時代性の比較はアナクロニズムを考察するための大きな視座を与えてくれる。

#### 引用文献

ジョルジュ・アガンベン（岡田温司ほか訳）『裸性』（平凡社、2012）

『パーゼル・ナショナル新聞』（1966年10月）

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計21件)

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(115)めぐり逢う朝：パスカル・キニヤールと音楽への憎しみレコード芸術 67(7)、2018、59-62. 査読なし

長木誠司 音盤街そぞろ歩き(110)グラントペラと知覚の変容(承前)、レコード芸術 67(2)、2018、59-62. 査読なし

オデイ、ジョン Art and Ambiguity: A Gestalt-Shift Approach to Elusive Appearances、in: Fabian Dorsch & Fiona Macpherson (eds.), Phenomenal Presence. Oxford University Press, 2018、58-76. 査読あり

加治屋健司 グロイスにおける芸術の制度と戦後日本美術、思想 1128、2018、87-99.

桑田光平 L'inquietante etrangete ; le motif de l'eau dans L'oeuvre de Pascal Quignard、Littera、第4号、2018、39-48. 査読あり

桑田光平 Les mondes de Gerard Mace, Le temps qu'il fait, 10月号、2018、171-191.

清水晶子 ビサイドのクィアネス イヴ・セジウィックにおける接触、読むことのクィア;続・愛の技法所収、2018、201-222. 査読なし

田中純 物質論的人文知(ヒューマニティーズ)としての「野生の考古学」—同時代への退行的発掘のために、現代思想 46/13、150-159. 査読なし

田中純 歴史のゴースト・プラン—宇佐美圭司の思想の余白に、up557、2019、37-44.

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(98)オペラ：愛の壊れるとき(2)ラ・トラヴィアータ、レコード芸術 66(2)、2017、64-68. 査読なし

長木誠司 ディスク遊歩人：音盤街そぞろ歩き(98)オペラ：愛の壊れるとき(2)ラ・トラヴィアータ(承前)、レコード芸術 66(3)、2017、62-66. 査読なし

桑田光平 フランス現代アート雑感、中央評論 302、2018、57-69. 査読なし

清水晶子 ダイバーシティから権利保障へ;トランプ以降の米国と「LGBT プーム」の日本、世界 2017(5)、2017、134-143. 査読なし

田中純 美のトポス、その限界と外部—W・メニングハウスの著作を手がかりに、思想 1123、2017、6-27. 査読なし

森元庸介 いくつかの(書かれた)会話について、文芸研究 135、2017、251-264. 査読なし

オデイ、ジョン and Redlich, Jeremy The Development of Critical Thinking in English Academic Writing Courses at the University of Tokyo, Komaba Journal of English Education (KJEE) 8, 2016、1-13. 査読なし

加治屋健司 フラットベッド画面としての単色画 中原佑介の韓国現代美術論、西洋美術史学会論文集第45号、2016、25-38. 査読なし

清水晶子 ポルノ表現について考えるときに覚えておくべきただ一つのシンプルなこと(あるいはいくつかのそれほどシンプルではない議論、北田暁大・神野真吾・竹田恵子(社会の芸術フォーラム運営委員会)『社会の芸術/芸術という社会』(フィルムアート社) 2016、151-74. 査読なし

田中純 『シン・ゴジラ』の怪物的「しるし」—未来からの映画、ユリイカ 12月臨時増刊号「総特集Ω『シン・ゴジラ』とはなにか」、2016、183-191. 査読なし

田中純 ネロ／ペルセウス—斬首された「自由」のイメージをめぐる、up533、2017、46-52.  
査読なし

②森元庸介 塵の教え フィクションに関するとりとめない註記、工藤庸子編『論集 蓮實重彦』(羽鳥書店) 2016、171-193. 査読なし

〔学会発表〕(計 18 件)

長木誠司 両大戦間の日本音楽、シンポジウム Music Integration and Innovation Symposium Across the Silk Road (招待講演)(国際学会) 2018.

オデイ、ジョン The Varieties of Pictorial Experience, Hamburg-Japan Philosophy Workshop, University of Hamburg, Germany, 2018/8/25 (招待講演)(国際学会), 2018.

加治屋健司 宇佐美圭司《きずな》の廃棄と画像の再制作、現代美術の再制作／再構築 保存修復の観点から(国際学会) 2018.

桑田光平 Encore quelques sordidissimes、旅、ことばからことばへ：パスカル・キニヤールと文学のアトリエ(国際学会) 2018.

清水晶子 Marriage Equality as Strategy: Family Registration, Moral Conservatives, and the “LGBT” Fad in Japan, Queering Japan” Conference” Haus der Universitaet Duesseldorf(招待講演)(国際学会) 2018.

田中純 歴史の Ghost Plan—宇佐美圭司の思想(の余白に) 宇佐美圭司《きずな》から出発して、2018.

長木誠司 尹伊桑の「同時代」基調講演、日本音楽学会特別例会(国際学会) 2017.

加治屋健司 Contemporary Art Outdoor Festival Controversy, Engaged Critic, Radical Art: Yoshida Yoshie in Art and Performance (国際学会), 2017.

刈間文俊 中国映画研究をふりかえって、社団法人中国研究所、2018年1月定例研究会、2017.

桑田光平 ジャコメッティと詩人たち、新国立美術館(招待講演) 2017.

清水晶子 Manipulated Distance and the Refusal of Touch, SCMS2018(国際学会), 2017

オデイ、ジョン Stability, Instability and Multistability in Perceptual Experience, Philosophy of Mind Workshop, 2016.

加治屋健司 岡崎和郎 オブジェの時代、企画展「岡崎和郎 WHO'S WHO 見立ての手法」関連講演会(招待講演) 2016.

加治屋健司 中原佑介の韓国、美術史学大会「韓国美術のアイデンティティ：過去と現在」、2016

清水晶子 The Translation of Politics: Introducing Queer Theories to Japan, Crossroads in Cultural Studies Conference 2016(国際学会), 2016.

田中純 デヴィッド・ボウイのノにおける死—Rock Death から Nachleben へ、表象文化論学会第11回大会・企画パネル「デヴィッド・ボウイの宇宙を探索する」、2016.

森元庸介 救済と数、統治思想としての オイコノミア：戦間期・社会経済思想の複合的研究研究会、2016.

〔図書〕(計 6 件)

高橋哲哉、前田 朗 思想はいまなにを語るべきか、三一書房、2018. 188.

桑田光平 モダニズムを俯瞰する、中央大学出版部、2017. 308.

桑田光平 分断された時代を生きる、白水社、2017. 270

田中純 歴史の地震計—アビ・ヴァールブルク『ムネモシユネ・アトラス』論、東京大学出版会、2017. 358.

加治屋健司、田中正之、尾崎信一郎、林道郎ほか ニューヨーク 錯乱する都市の夢と現実、竹林舎、2017. 502.

田中純 過去に触れる：歴史経験・写真・サスペンス、羽鳥書店、2016. 600.

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：オデイ、ジョン

ローマ字氏名：O'DEA, John

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院総合文化研究科

職名：教授研究者番号(8桁): 50534377

研究分担者氏名：加治屋健司

ローマ字氏名：KAJIYA, Kenji

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院総合文化研究科

職名：準教授

研究者番号(8桁): 70453214

研究分担者氏名：刈間文俊  
ローマ字氏名：KARIMA, Fumitoshi  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：00161258

研究分担者氏名：桑田光平  
ローマ字氏名：KUWADA, Kohei  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：準教授  
研究者番号（8桁）：80570639

研究分担者氏名：清水晶子  
ローマ字氏名：SHIMIZU, Akiko  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：40361589

研究分担者氏名：高橋哲哉  
ローマ字氏名：TAKAHASHI, Tetsuya  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：60171500

研究分担者氏名：田中純  
ローマ字氏名：TANAKA, Jun  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：10251331

研究分担者氏名：森元庸介  
ローマ字氏名：MORIMOTO, Yosuke  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：準教授  
研究者番号（8桁）：70637066

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。